

十九世紀西スーダンにおける政治的領域

赤 阪 賢

【要約】西スーダンの地域的特性は、サハラ砂漠を越えて恒常的に維持された地中海世界ことにイスラム世界との歴史的交渉により、イスラム文化が社会に深く刻印されていることにある。そこでは社会の根底に深い流動性が潜んでおり、従来のアフリカ部族社会論において取られた小宇宙としての部族のモザイク的配列という視点では、西スーダンの地域の正確な把握に程遠い。九世紀以後、相ついで広域的展開を遂げた古「王国」の存在も、こうした西スーダンの地域的特性を如実に示すものである。植民地分割の直前の時代である十九世紀においても、Uthman dan Fodio, Al-hajj 'Umar 及び Samory Ture の、カリスマ的権威を帯びた指導者の征服活動により、広大な政治的領域（しばしば「帝国」と称される）が形成された。これらは互いに色合いを異にしながらもイスラム改革運動をその基盤に持つ点で共通の性格を有している。しかしその領域的展開や領域支配の構造については、各々の社会構成や直面した政治的・軍事的局面により独自の展開がみられるのである。

史林 五八巻一号 一九七五年一月

ま え が き

たとえば、ヘーゲルに次のような言葉がある。「アフリカは歴史的世界には属せず、したがってそこには運動と発展とは見出されない^①。」彼にとつては、アフリカ（いわゆるサハラ以南のブラック・アフリカ）は「自分の中に閉じこもり……歴史の真昼の彼方で夜の帷に包まれているお伽の国^②」と解された。周知の如く、ヘーゲルにおいては、世界史の実体をなすものは精神とその発展過程であり、その完全な実現の形態が国家であった。ところが、アフリカにはそうした「歴史」や「国家」の形成は認められない、というのである。

アフリカには固有の歴史が存在しないと考える、あるいはヨーロッパ列強の植民地的侵略による接触をアフリカ史の開幕とする考えは、今日でも全く拭解されたとはいえない。^③ もちろん、その根底には文献史料の欠除したところに歴史は存在しえない、という見解が横たわっている。ところが、今日では、いっばんに無文字社会 *non literate society* に属すアフリカ社会については、言語学的資料・口頭伝承 *oral literature*・人類学的資料・栽培植物や家畜の伝播・芸術様式の伝播、そして社会組織の分布などの援用により歴史の再構成の試みがなされている。^④ また一方では、歴史学の伝統的手法である文献資料にもとづく歴史研究が、アラビア語の旅行記・年代記、ヨーロッパ人による探検記・旅行記、そして植民地征服に従事した軍人や行政官の記録などに依拠して行われてきた。^⑤ 更にまた、現在におけるアフリカ史の研究段階は、すでにアフリカを世界史の一環としての文脈の中で把握するという視野を要請するに至っている。とりわけ、本稿で問題とする西スーダン *West Sudan* という地域は、サハラ砂漠を越え地中海沿岸地方との恒常的な交渉を有していたのであり、そこではもはや、アフリカ社会の内部的発展という視点に加えて外部世界との関連を考慮に入れることが不可欠となっているのである。

ところで、西スーダンは、「……恵まれた国家の出現する地帯……」「政治的豊沃さを持っていた」地域としばしば称される。^⑦ アフリカ史におけるいわゆる「中世」の時代から西スーダンには、ガーナ *Ghana*、ソンガイ *Songhay*、マリ *Mali* などの王国が広域な展開をみせつつ興亡を繰り返し、究極的には広大な乾燥の空間に解消を余儀なくされるに至っている。また、本稿でとりあつかう十九世紀、すなわち植民地列強によるアフリカ分割の直前の時代にも、その領域の広域的展開のゆえに「帝国」^⑧ と称される政治的領域の形成をいくつもみているのである。それらは通称、フラニ「帝国」*Fulani Empire* (*Sokoto Caliphate* とも称される)。一八〇四年—一九〇三年、現在のナイジェリア連邦共和国北部に版図を拡大した、トックロール「帝国」*Tukulor Empire* (一八五九年—一八九三年、主として現在のギニア共和国からマリ共和国にかけて展開した)、マンディンカ「帝国」*Mandinka Empire* (一八〇〇年—一八九三年、現在のギニア共和国、シエ

ラ・レオネ共和国、マリ共和国、コート・ジボアール共和国そしてガーナ共和国にかけて領域を移動した^①、と呼ばれるが、ある試算によればそれらの領域は各々四十六万平方キロメートル、三十八万平方キロメートル、二十九万平方キロメートルに至った。これらの国家の性格については、イスラムに基づく宗教運動と規定されるいっぽうでは、植民地的侵略に対する抵抗の側面が評価されるなど、一面的に把握することは困難である。加えて、個々の国家の起源や展開の過程、政治構造、そして領域構造などの総体を掌握しつつ、比較検討を試みる研究はいまだ皆無である。ところで、われわれはすでに、アフリカ社会の伝統的形態が、植民地時代の直前である十九世紀を「民族学的現在」*ethnological present*と固定することにより求められるとする立場の限界に気がついている。と同時に、主として人類学を行った従来のアフリカ政治組織の分類学^②にも、それらが殆んど当該の政治組織（あるいは国家）の領域的側面を等閑視している点で不満をいだく。たしかに、P. C. Lloyd も正しく指摘する通りであるが、アフリカの国家の研究においてはとくに境界の画定の困難性も存在したであろう。そして、従来の研究における領域についての無関心・困難性が、十九世紀西スーダンにおける国家形成についての理解をおくらせたのも事実である。そこで本稿では、十九世紀において西スーダンに繰り上げられた三つの政治的領域を扱いかい、各々の形成の政治過程を追うことによって、そのいわば反映としての領域の構造を掴み出して、従来の研究の余白を埋めたいと考える。しかしながら、アフリカ史に対する現在の我が国の学問的情況をかんがみ、論述が説明的かつ概論的に流れざるを得なかった点を心苦しいながらあらかじめ断わっておきたい。

① ヘーゲル、「歴史哲学、序論第二編、世界史の地理的基礎」ヘーゲル全集10（岩波書店）p. 150。

② *Ibid.*, p. 140.

③ 山口は、この立場に加えて、歴史を特定の文化およびその文化に特徴的な思想様式を理解する手段の一つとして考える立場、また歴史を必ずしも文化の内側に入って見るものではなく、外的に観察されたしかめられる歴史的事実を媒介として、客観的時間の上に配列し、そ

これらの事実間の関係を、内的世界（文化）の構造的必然性と、外的世界の関わりにおいて把握しようとする立場、をあげている。山口昌男、（一九七〇）「前植民地時代のアフリカ」、岩波講座、世界歴史9、近代3、pp. 293-294。

④ D. F. McCall (1964), *Africa in Time- Perspective, A Discussion of Historical Reconstruction from Unwritten Sources*. Boston.

⑤ 主に口頭伝承に依存した歴史究にはたとえば、マリ共和国に

関しては次のような研究があらわれている。

- D. J. Niane, (1960) *Soudouda ou L'Épopée Mandingue*. Paris.
- J. Boulnois et B. Hama (1954) *Empire de Gao*, Paris. H. Ba et J. Daget (1962) *L'Empire peul du magna, 1818-1853*, Paris.
- ⑥ 西アフリカでは、ナイジェリアの Ibadan 大学がその中心となつてその成果は Ibadan History Series が相次いで発表されている。
- ⑦ L. Febre, (1922) *Terre et L'Évolution Humaine* 『大地と人類の進化』田辺裕訳、不(岩波書店) p. 202.
- ⑧ アフリカの社会形態を政治組織を、世界的視野のなかたに位置づける試み、あるいはアフリカ史の時代区分の問題は、さまざまな端緒にわたらばかりである。したがって、この使用する「帝國」の語が、あつたアフリカ研究者が慣用される以上のものは決つてない。
- ⑨ J.B. Webster and A. A. Boahen, (1967) *The Revolutionary Years, West Africa since 1800*, London, p. 47.
- ⑩ 原忠彦 (一九七四) 西アフリカ・ギニアの jihad と関する意識とシム・アフリカ言語文化研究、pp. 147-163.
- ⑪ R. J. Rothenberg & A. A. Mazrui (eds), (1970) *Protest and Power in Black Africa*, Oxford Univ. Press.
- ⑫ 近年のアフリカにおける国家の研究は部族の政治組織研究に依拠し、衆知のたまり、Fortes と Evans-Pritchard の 2 人の Government を持つ社会とそれを持つた社会の二分法を始点とする。この二分法前者は集権化された権威、行政機構、司法制度を持つ、つまりは国家を形成するのに対し、後者は分節リネーム組織からなる社会とみられる。

この二分法はさらにより精密な分類学を目指す論議を生み出すものになったが、同時に国家の起源や分類に関する語説をも生むにわたつた。たとえば H. S. Lewis は、国家を一次的国家 (primary state) と二次的国家 (secondary state) とに分け、アフリカの国家を一次的国家 (アフリカの外部の) からの影響を受けて派生した二次的国家に起源し、征服がその国家形成の大きな契機となつていくと説く。さらに A. Southall はアフリカ国家をよくもたらわぬ未開国家 primitive state の性格をいって、分節国家 segmentary state の概念を提出して、これらの国家の起源を性格をいっての議論を、J. Vansina が回避したように、一九世紀の西アフリカの国家について対象として取りもつてきた。

- M. Fortes and E. E. Evans-Pritchard, (1940) Introduction, *African Political Systems*, Oxford Univ. Press. J. Middleton & D. Tait (eds), (1958) *Tribes Without Rulers*, London. H. S. Lewis (1966) *The Origins of African Kingdoms: *Cadets & *trides africaine**, 6 pp. 402-407. A. Southall (1965) A Critique of the Typology of States and Political Systems, *Political Systems and the Distribution of Power*, M. Barton (ed.) pp. 113-138. J. Vansina, (1962) A Comparison of African Kingdoms, *Africa*, 32-4. pp. 324-335.*
- ⑬ P. C. Lloyd, (1965) The Political Structure of African Kingdoms, *Political Systems and the Distribution of Power*, M. Barton (ed.) London, pp. 63-112.

1 西スーダンにおけるイスラム国家の形成

十九世紀における西スーダンの国家形成の動きについて、イスラムの改革運動の文脈において把握する視点は、H. F. C. Smith によつて最初に提唱された^①。今日では、イスラムに基盤を置く国家形成の源流は、通常十八世紀のフータ・ジャロン Futa Jallon (現在のギニア共和国内陸の山地) や、フータ・トロ Futa Toro (現在のセネガル共和国の河谷地方) におけるイスラム神権国家の形成にさかのぼる^②。ここでは西スーダンにおけるイスラムの浸透とその影響について多くを述べる余地はないため^③、本論の理解に最小限必要となる略史を概説しておくにとどめる。

西スーダンにおけるイスラムの浸透は、El-Bekri の記述によつて、十一世紀に遡ることが定説とされている。さらに、フアーティマ朝の衰退に伴なうマグリブに対する影響力の弱体化により、ベルベル族の一派サンハジャ Sanhaja によるアルモラヴィッド Almoravid 運動が生起するや、その影響は遠く西スーダンにも波及した。セネガル Senegal 河口の小島には *wbazi* も建設されるに至り^④、今日のモリタニア共和国からセネガル下流地帯は、イスラムの影響が最も強く及び、それに従つてアラブ、ベルベルとネグロとの混血も行われたと考えられる。後代において、イスラム改革運動とそれに伴う国家形成の動きを領導した部族の形成もこの地方においてみられるのであり、トゥクロールの名もやはり El-Bekri の記述に現われ、サハラ遊牧民とネグロとの混血と考えられる彼らは、その時点ではムスリム (イスラム教徒) の総称であったのである^⑤。トゥクロールはセネガル川下流域に小国家を建設したのであるが、十三世紀にはさらにフラニ Fulani 遊牧民がこの地方に入り、トゥクロールと次第に同化しイスラム化したことが知られている。ところが、このフラニはフータ・トロ、フータ・ジャロン地方に、さらに東のニジェル Niger 川内陸デルタのマッシーナ Masina 地方へと分散したが、十八世紀から十九世紀にかけてのイスラム国家形成は彼らの動きと密接な関わりを有していた。たとえば、フータ・ジャロン地方においては、十八世紀まで非ムスリム pagan であるマンディンゴ Mandingo 族による村落連合的な政治体

制がしかれていた。^⑩しかるに、遊牧民としてこの地に移入したフラニは農耕民のマンディンゴと共棲関係を維持しつつ、次第に定住化すると同時にイスラム化を遂げたのである。^⑪フータ・ジャロン地方におけるフラニじしんの伝承によれば、マッシーナ地方から移住した Mamadu Saïdi Bari なる人物が最初のムスリムのフラニであったという。そして、彼ら及び影響は直ちにフータ・ジャロン地方のフラニに波及し、通称 Karamoko Alfa として知られるカディリーヤ Qadiriyya 派イスラムの信奉者により、一七二六年に非イスラム政権に対するジハード（聖戦）*jihad* が宣言された。既成体制の転覆後、政治的・宗教的統合を完成した Alfa は自らアルムィン ^⑫ *almamy* (*amir al-muminin*) の称号を冠し、さらに首都を新たに Timbo に定めた。この神権国家じたいは、そののち後継者問題をめぐる抗争で、支配者の二家系が交替で *almamy* に就く事態に至り、統一的支配を回復するには至らず、こうした政治的状况が次の世紀における社会変動を用意することになったのである。

いっぽう、フータ・トロ地方においては、トゥクロールがピラミッド的成層構造と地縁的クラン *Local clan* 組織に基盤を置く社会を形成していた。^⑬それは貴族 *toroBé*、自由民 *subalBé*、カースト的職業集団 *nyemBé* の身分による階層と、一定の領域を占住するクランの形成する地域集団とが組み合わさったものであった。セネガル河谷に沿う带状のたとえば、*Bosseia*, *Lao*, *Toro* などの領域を有する地縁的クランの支配層は *tubié* と称し戦士階層を形成した。また、貴族の *toroBé* は同時にイスラム聖職者でもあり、その宗教的活動はフータ・トロ地方に限らず西スーダン全域にわたった。近接するフータ・ジャロン地方におけるイスラム神権国家の形成に強い刺激を受けた *toroBé* のひとり、*Suleyman Bai* は当時フータ・トロを支配していた非ムスリム政権に対しハードを宣し、一七六九年に新たな政権一致の体制を樹立した。しかし、この新国家は前述したようなトゥクロール社会における地縁集団の分立・抗争という内部的弱点をそのまま抱えたものにすぎず、その結果として *almamy* の支配に限界もあったのである。

さらに、ニジェル中流のマッシーナ地方においても、十三世紀頃より西方より移住を開始し大きなストックを形成した

フラニが、十八世紀初頭までこの地方を支配したバンバラ Bambara 族のセグ Segou 王国の桎梏を脱し、十九世紀初頭に Shaikh Ahmadu のもとでイスラム神権国家の成立に成功している。これらの本稿の主題に先行するイスラム神権国家の形成は、イスラム教義のうえでカーディリーヤ派の影響下に行われたものであった。いっぽう、十九世紀のそれらは何れもティージャニーヤ Tijaniyya 派の影響を強く受けていると一般に指摘される。両派の相違に関して J. Suret-Canale によれば、ティージャニーヤ派の平等主義に対し、カーディリーヤ派は教派内部に発達した階梯制を抱えていたことがあげられる^④。そして、これを敷衍すれば既述のイスラム神権国家の持つ内部的弱点は、こういった教派自体の性格から生れたとも考えられるのである。

- ① H. F. C. Smith, (1961) *The Islamic Revolutions of the Nineteenth Century. Journal of the Historical Society of Nigeria*, vol. 2, No. 2.
- ② 同じくこのイスラム神権国家の語は、原語から世俗的酋長と宗教的酋長が同一人たがって兼ねたが、イスラム法 *shari'ah* を国家法として採用されたことの意味に発している。原 *op. cit.*, p. 148.
- ③ 原は Curtin による近説を紹介して、「一九世紀の *jihad* 運動を十七世紀半葉に比擬して考えればならぬと指摘している」。原 *op. cit.*, pp. 148-150. P. D. Curtin, (1971) *Jihad in West Africa: Early Phases and Interrelations in Mauritania and Senegal. Journal of African History*, vol. 1, pp. 11-24.
- ④ 西スーダンをめぐり西アフリカに存在するイスラームの歴史的研究の著書は、J. S. Trimingham (1962) *A History of Islam in West Africa*. Oxford Univ. Press.—(1959) *Islam in West Africa*. Oxford Univ. Press. (1968) — *The Influence of Islam upon Africa*. London. J. Kritzeck & W. H. Lewis (eds.) (1969). *Islam in Africa*. New York. I. H. Lewis (ed.) (1966). *Islam in Tropical Africa*. Oxford Univ. Press. V. Monteil (1971) *L'Islam noir*. Paris. X. de Planhol (1968) *Les fondements géographiques de l'histoire de l'Islam*. Paris. A. G. B. Fisher & H. J. Fisher (1970) *Slavery and Muslim Society in Africa*. New York
- ⑤ El-Bekri, (1968), *Description de l'Afrique Septentrionale*. French trans. by M. G. de Siane, 1965, Paris, pp. 328-329. El-Bekri の記述は Ghana 王国の最北端に位置する Awdaghost について用いている。この一〇世紀に Awdaghost を治めた Ibn Hawgal, の記述を引く Ghana の歴史を著した N. Levtzion, (1968), Ibn-Hawgal, The Cheque, and Awdaghost. *Journal of African History*, vol. IX, No. 2, pp. 223-233. R. A. Mauny, (1954) *The Question of Ghana*. *Africa*, vol. 24, pp. 200-213.
- ⑥ J. M. Abu-Nasr, (1971) *A History of the Maghrib*. Cambridge Univ. Press. pp. 92-95.

② Umar al-Nagar, (1969) Takrūr, The History of a Name. *Journal of African History*, X. 3. p. 365.

③ Fulani 族 (フーリ) Fuibe が正しく呼称であるが、本誌では一般に流布する通称を利用した) は、その起源についてはローカライズとの混血とする説もあるほど紛糾している部族で、本来遊牧の生活様式をとる。その分布は現在のキニア・セネガルの Futa Jallon, Futa Toro 地方を西端に、Niger 河中流地方の Masina から、東はナイジェリア、カメルーン北部の西ヌーメンの広域に分布している。

④ Y. J. S. Martin, (1970) *L'Empire Toucouleur, 1848-1897*. Paris, p. 14.

⑤ W. Derman, (1973) *Serfs, Peasants and Socialists: A Former*

Serf Village in the Republic of Guinea. California. pp. 12-13.

⑥ W. Rodney, (1968) Jihad and Social Revolution in Fouta Djallon in the Eighteenth Century. *Journal of the Historical Society of Nigeria*, IV-2. p. 270.

⑦ 原は、「信仰共同体の指導者」のなまりである almany の称号を、シノーバによる神権國家の指導者が、このことの象徴的意義の大きさを強調している。原、op. cit., p. 157.

⑧ B. O. Ojérumtémehin (1972) *The Segu Tukulor Empire*, Ibadan History Series. London, pp. 7-14.

⑨ J. Suret-Canale, (1961) 黒アフリカ史：その地理・文明・歴史 (野沢協訳) p. 188.

2 ウスマーン・ダン・フォディオによるジハードの領域的展開

1 ハウサ地方 Hausaland の社会的状況

ウスマーン・ダン・フォディオ Uthmān dan Fodio (Uthmān b. Muḥammad b. 'Uthmān b. Saīh) (以後ウスマーンと省略して記す) のジハードによるフラニ帝國の成立の前史として、ハウサ地方 Hausaland (今日のナイジェリア北部州にほぼあたる主にサバンナ地帯) の社会状態について概略する必要がある。ハウサ Hausa 農耕民の居住するこの地方についての、書かれた記録として重要なカノ年代記 Kano Chronicle によれば、^⑩ いわゆるハウサ諸都市のひとつ Kano は、九九九年に初代王 Bagoda により創設されたが、十四世紀後半にイスラム教が西方よりもたらされ、十五世紀中頃にはアラビア人の定住がみられたという。イスラム的要素の強い、囲壁を有する都市的集落を核とした小國家には、上記の Kano の外を Daura, Rano, Katsina, Zazzau, Gobir など七 Birana (Garun Gabas とも称された) の七國が含

まれ、これらは *Hausa Bakwai* (字義どおりには七つのハウサ) と称されていた。さらに、ハウサの勢力が南の森林地帯に伸展するにつれ、Zamfara, Kebbi, Yelwa (Yauri), Nupe, Gwari, Ilorin として Kwororofa の七国が形成され *Banza Bakwai* と称された。これらのハウサ諸国家は、十五世紀末にニジェール中流部のガオ Gao を首邑とするソンガイ王国の支配下に置かれ朝貢を課せられた^②。しかし、十六世紀末のモロッコの侵略によるソンガイ王国の衰退後、その支配を脱れたハウサ諸国家は活発な商業活動を開始したが、それは各々のハウサ諸都市の占める位置がサハラ砂漠南縁にあって遠距離交易の終結点 *entrepôt* となったことに由来する。各都市は、染色、織物、土器や奴隷などの、主産品の生産物化を生むに至ったことが知られている^③。

ハウサ地方における政治史は、これらのハウサ諸国家間の商業的利益の獲得を目指した抗争に色どられたが、十七世紀から十八世紀にかけては *Katsina* が最大の勢力を得たという。ところで、のちにウスマーンの抬頭する地盤となったニジェール支流のリマ Rima 川流域地方においては、Gobir, Kebbi, Zamfara の三者が互いに拮抗状態にあったが、十八世紀末にサハラのアアシスである Air のトゥアレグ Tuareg 族の南下が契機となり、直接的圧迫を受けた北方の Gobir が他を支配するに至った。そして、これらのハウサ諸国家の分立・抗争による社会的混乱は、さらに部族関係の錯綜によっても助長されたのであるがそのうち、既述のフラニの動向が重要な鍵を握った。ハウサ地方におけるフラニの移住は十三世紀にさかのぼるとされるが、本来の生活様式をとる遊牧フラニ *cattle Fulani (burungyi)* の中からは、町に定住しイスラム化した *town Fulani (gidan)* も出現した。またフータ・トロ地方からの移住者 *toronkawu (pl. torobé)* も広義のフラニに含まれていた。さらに、サハラの上アアレグも南下するにつれイスラム化するなど、ハウサ地方における部族間の宗教・文化・経済的關係は複雑な様相をきたしていたのである。

2 ジハードによる征服領域の形成

ウスマーンは一七五四年 Gobir に生まれ、その家系はフータ・トロ移住者である *torobé* に属していたという^④。イス

ラム聖職者としての経歴は、その峻格な教義のゆえに後にゴビールを追放された al-hajj Jibrii b. Umar に師事したことに出発したが、マラブー *marabou* (説教師) としての活動は一七七四年頃より始まり、Kebbi, Zamfara 地方の巡回とともに、ハウサ地方全域の聖職者との連絡を緊密にした。彼の活発な布教活動は時の Gobir 王 Natata に危機感をもたらし、それは「生得的にムスリムである者のみがムスリムであり、最近の改宗者はもとの信仰 (アミニズム) に戻るべきである」とした告示に表明されている。加えて、ウスマーンが戦争捕虜のイスラム改宗を容認したことが、既往のハウサ支配層との決定的対立を招いたが、それはハウサ王国のムスリム支配層と、非ムスリムの農耕民・奴隸といった被支配層という二分的な階層秩序を根底からくつがえす結果となるからであった。従来のウスマーンの宗教運動をハウサ対フラニという部族的対立に起因するという考え方は最近では否定的になっており、たとえば M. R. Waldman の如きはハウサ農民層もまたフラニと利害を一にしていたと主張している。^⑧

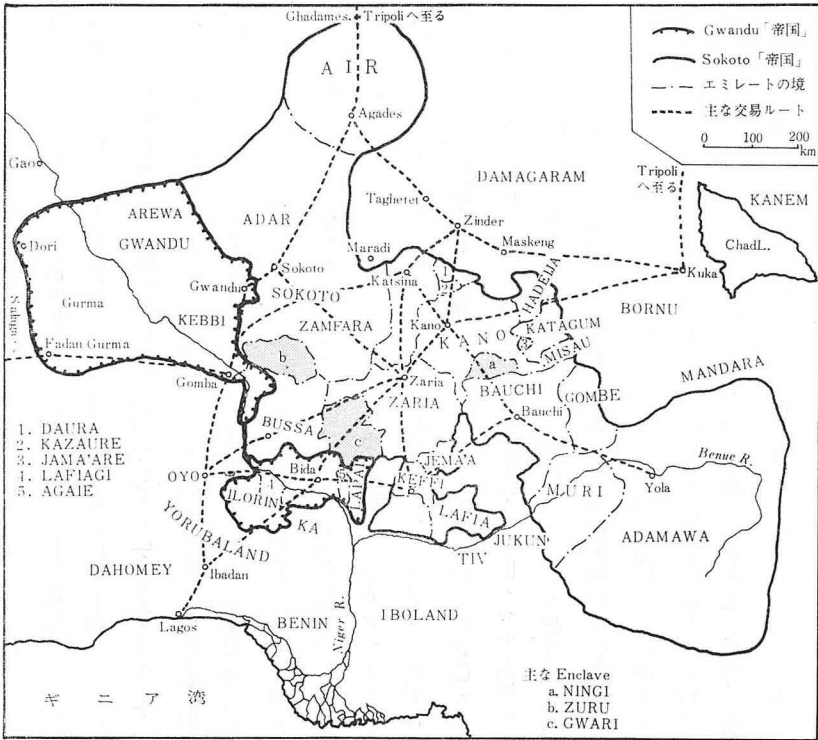
もともと、ハウサにおけるイスラム受容は折衷的な性格を帯びていたが、ウスマーンの改革運動はそれらに対するジハードとして具体化し、Gobir における拠点 Dogel からの追放は信徒からはヒジュラ *hijra* (聖遷) と解され同時に *amir al-mu'minin* (信仰の指導者) に擁立された。ウスマーンのジハード宣言の冒頭は次のとおりである。^⑩正義にもとづく支配はイジマー *ijma* (意見の一致) による義務である。悪の禁止はイジマーによる義務である。異教徒の地からのヒジュラはイジマーによる義務である。信仰への加担はイジマーによる義務である。*amir al-mu'minin* の選出はイジマーによる義務である。そして彼とその代理に対する服従はイジマーによる義務である。ジハードの遂行はイジマーによる義務である……。

この宣言にはさらにイスラムへの敵対者を五段階に分け *al-bughlat* (迫害者)、*al-muharibin* (挑撥者)、*al-muhammalin* (墮落者)、*al-muradain* (背教者) そして *al-kafir* (異教徒) に対する戦いをイジマーによる義務としている。^⑪ こういったジハード直前におけるハウサ地方の宗教的混乱状態は、ウスマーンの運動の根拠をフラニ対ハウサという部族的対立

に求めることを困難にするのであり、その事情はウスマーンの第一子ムハンマド・ムハムマド Muhammad Bello の「ボルヌ Bornu に対する攻撃の最初の段階で、遊牧民たちは戦利品を得るや否や帰散してしまい、そのうち軍隊は弱少になってしまった」という記述のとおり、遊牧フラニの参加の仕方もおくれたのである。

ウスマーンのジハードの経過については、H. A. S. Johnston や M. Last に詳しく、本稿ではその概略を記しておく。かれは Degel からのヒジュラののちハウサ地方の西北辺境を移動したが、Kebbi 東方の Gwandu を拠点として Gobir, Kebbi をついで Tuareg の連合軍を撃退し、やがて Gwandu に囲壁を設けて以後のジハードの基地とした。そして一八〇五年に Kebbi の首邑を占領し、次いで Zamfara から Zaria を征服、一八〇七年 Katsina、一八〇八年 Daura、Gobir を征服、さらに中央スーダンのチャド Chad 盆地の強大なイスラム国家ボルヌ Bornu に侵攻し、一八〇九年には Kano を征服した。かくして、ジハードによる征服の結果ウスマーンが得た領域は、旧ハウサ諸国家の範囲を越え、さらに東は Adamawa 山地、南はニジェール河以南のヨルバ Yoruba 地方にも達した。

この新しい政治的領域——フラニ「帝国」（その統治はまた首邑の名称をとり Sokoto Caliphate とも称される）——は、以下のような構造を持っていた。ジハードの起点である旧ハウサ王国の Gobir, Zamfara, Kebbi の三者は解体され併わせて新しい核心地域を形成することになる。遊牧民のキャンプ地であった Sokoto に囲壁を設けた首都建設もその意図の表現であった。こうして Sokoto と Gwandu とは共に領域の中心となった（ウスマーンの死後、その領域は東西に二分されそれぞれ首都とするソコト「帝国」とグワンダッ「帝国」とが両立した）。旧ハウサ王国のうち Kano, Katsina, Zaria においてはハウサ支配層が追放されたが、旧来の国家構造はフラニのエミール *emir* が支配するエミレート *emirate* の形態をとり存続した。また新たなエミレートが南東の Bauchi 台地に Bauchi, Gombé, Misan、東の Adamawa 山地に Adamawa, Muri が形成された。南部には Borgu 王国が解体されヨルバ地方に Ilorin, Lafagi, Pateggi のエミレートが、北部ではサハラのオアシス Adades を中心とした Air のエミレートが形成された。



第1図 Fulani「帝国」(Sokoto「帝国」、Gwandu「帝国」)の領域
 [Johnston (1967) を改変]

政教不可分の首長(シャイク *shaihu* やスルタン *sultan* とも称される)により統轄されたフラニ「帝国」は、諸エミレートの連邦の形態をとり必ずしも集権的な支配が貫徹されたわけではない。二「帝国」分立時代には、ソクト「帝国」においてはフラニのシャイクやエミールに対するハウサの旧勢力の抵抗は Kebbi や Gobir において顕著であり、さらに首都から西方わずか数十キロにも Argungu の小政治勢力の抵抗が認められた。また北方に逃れた旧 Katsina 王国のハウサ支配層は新たに Maradi 王国を建てたが、その王にとってはフラニに対する抵抗が至命でありその外征が国家の最大の行事であった。¹³⁾ Zaria の場合も事情が良く似ており南の Zuba 山地へ逃れた支配層は Abuja 王国を建設し抵抗をつづけた。¹⁴⁾ グワンドゥ「帝国」の場合はニジェル西

岸に Borgu の反フラニ勢力が介在したために領域の南北が分断される事情と、スベ、N'pé やヨルバといった異部族のエミレートを抱えたことにより、その支配はいっそう緩慢となり、各エミレートへの貢納を強要するための軍事行動がようやく可能という制限された支配統治にとどまらざるを得なかった。

こうした領域統治の内部的・外部的な要因による不安定性を克服するために、イスラム国家 *dar al-Islam* の建設を意図した試みは、たとえばソコト「帝国」の初代シャイク Bello の積極的な *ribat* 建設に認められる。また囲壁を設けた町 *husun* の建設も同時に着手されたが、Last はこれらを明らかに初期イスラム帝国における故事を模倣し踏襲したものである^⑤。つまり、かつてベドウィンの定住化・イスラム化を計ったと同様、これらの *ribat* や *husun* の建設は遊牧フラニの定着を意図していた。その内部にはモスク、コーラン学校を配置し、イマーム *imam*（礼拝の長）、カーディ *qadi*（裁判官）、マラーブ *marabout*（説教師）が居住しそこではイスラム法 *shari'a* が適用され、フラニやハウサをイスラム共同体 *jama'a* に練り込む機能が果された。もちろんこれらは各地の反乱・抵抗に対する軍事的防衛の役割をも果たしたが、そのため Gobir に対しては Lajinge, Shinaka, Kware が北方に、Zanfara に対しては Bakura, Gandi が Sokoto の南西に、Kebbi に対しては Rima 峡谷のリッジ上に Silame が、南には Tambawel などの *ribat* が位置したのである。

3 フラニ「帝国」の領域構造

ジハードによる征服にもとづいて成立した政治的領域の支配は、一種の二重構造の形態がとられたが、ソコト「帝国」を例にとるとその実態は次のようであった。各々のエミレートにおいてはジハードの指揮者がエミールに就任し、さらにその後継者はエミールの家系の中から選出されるに至って世襲的な支配階層が形成されていった。しかし、エミールの選出は首都のシャイクを補弼する大臣 *wizir* の承認を通してシャイクの最終的な承諾を要した。シャイクは実際にエミール廃位の権限を有しており、そういった例は統治の緩慢なグワンドゥ「帝国」においてすら N'pé のエミール退位に見られ、またソコト「帝国」においても Zaria のエミールは一八五三、七一、八一、八八の各年に退位を余儀なくされてい

る。^⑧ 大臣はシャイクの親族や寵臣が任命されて、シャイクとエミールとの仲介を務めた。シャイクに対するエミールの義務は年二度 *Id-el-habir* と *Id-el-Fir* のイスラムの大祭・小祭の際首都への参勤と貢納とであった。貢納の徴集は大臣に監督の責務があり、怠慢なエミールには軍を派遣し強制的な徴集を行った。各エミレートから送られた貢納品について一八二〇年代にハウサ地方に入った H. Clapperton の記述から拾えば、ウマ・子安貝貨 *cowry*・綿布 (Kano)・奴隸 (Ad-amawa)・奴隸・子安貝貨 (Zaria, Zamfara)・奴隸・鉛鉱石 (Jaekoba)・ウヤ・雄牛・奴隸 (Hadiga, Katagum, Zaonima)・奴隸・子安貝貨・綿布 (Katsina)・雄牛・ヒツジ・ラクダ・綿布 (Ader, Tadeia) のごとくである。また一九五〇年代の探検家 H. Barth の記録にも^⑨ Zaria からウマ三〇頭・長上衣五〇〇着・子安貝貨二〇〇万個、Katsina から子安貝貨八〇万個・種馬一頭がソコトに納められたとある。こうした記述からも、各エミレートの地方的特色や勢力の大小、さらに中央への帰属の仕方の変差をうかがうことが可能なのである。

さらに、エミレートの内部に属国が存在する例もみられたが、これらの属国は旧ハウサ王国時代に既に存在しており、シハードに際しウスマーンの直接の麾下に参加が、後にエミールとなる指揮者の傘下に属することにより新体制のエミレート内で属国にとどまる例が多かった。そしてエミレート内における属国の自律性はエミレートの首邑との近接の度合に左右されることが多く、例えば Zaria エミレートの場合は Jemaan, Dororo, Nassarawa Kwotto, Keth の三属国が南部の ベヌエ Benue 川に面し大きな領域を有し相対的な独立性を示していた。^⑩ いっぽう首邑近傍の Kajuru, Kauru Fatika, Kagarko, Lere, Durum の各属国は独立性を失い領域規模も小さく限定された。属国の首長は主なりネエジ長で構成される評議会において選出後、エミールの承認を得て首邑で即位式を行ったが、エミールはその廢位権を保持した。エミールと属国の首長の仲介としてエミールの官僚 *hofa* がやはり属国の貢納徴集の責務を負った。貢納としては奴隸一〇〇人が期待されたが、奴隸狩りに伴う兵員移動にはエミールの承認が必要とされ、貢納の怠慢にはエミールによる軍事的制裁がとられた。このように、シャイクとエミール、エミールと属国首長、との間には首長の選出や廢位、貢納のシ

3 アル・ハジ・ウマルによるジハードの領域的展開

1 ジハードによる征服領域の形成とその構造

アル・ハジ・ウマル Al-hajj Umar b. Sa'id Tall は、十八世紀の末、フータ・トロ地方の Aloar に生まれ、その出自は *toroBé* であり、父もカディリーヤ派のマラーブであった。^① ウマル自身は、しかし、当時 Senegambia 地方に流布しはじめたティジャニーヤ派に帰依し、一八二六年にはメッカ巡礼に立った。そしてアラビア半島におけるティジャニーヤ派カリフ *khalfa* の Muhammad al-Ghali に師事し、帰途に際して西スーダンにおけるティジャニーヤ派のカリフに任命された。^② メッカよりの帰路カイロを経て、中央スーダンのボルヌ Bornu では支配者と姻戚関係を結び、さらにソコトに七年を過してジハードにも参加し、ムハンマド・ペロの娘をもめとった。このようなイスラム国家の支配層との姻戚関係を通じてすでに帰郷の前に、ウマルは宗教的指導者としての地歩を固めていたといえる。^③

ウマルのセネガンビア地方における宗教的権威の確立過程は B. O. Oloruntimehin の研究に詳しいが、それに従い略述すれば次の通りになる。一八四〇年フータ・トロに帰るや否や、フータ・シャロンに移り、その地方の首都 Timbo の近傍 Dyegoumko にザ・ウイヤ *zawiyas* 建設を行った。*zawiyas* はもともと、北アフリカでは十三世紀よりスーフイ *sufi* のマラーブにより盛んに建設された自給自足的な信仰共同体組織であるが、ウマルの場合も8年間のこの Dyegoumko 滞在期間に信奉者を増大した。そして、既存のカディリーヤに属するフータ・シャロン支配階層との対立が深刻化すると、一八四八年に Dyegoumko からニジェル川上流地方の Dingiray へと拠点を移したが、その移動はジハードに先立つヒジュラとして信奉者には受けとめられた。^④ また、これらの拠点において、ジハードに備える目的で積極的に交易活動を行い、大西洋岸の Sierra Leone のイギリス交易基地や、Rio Nunez, Rio Pongas 河畔のフランスの交易基地と接触し、

金、奴隸、農産物と、銃、火薬とを交換したといわれる。^⑥

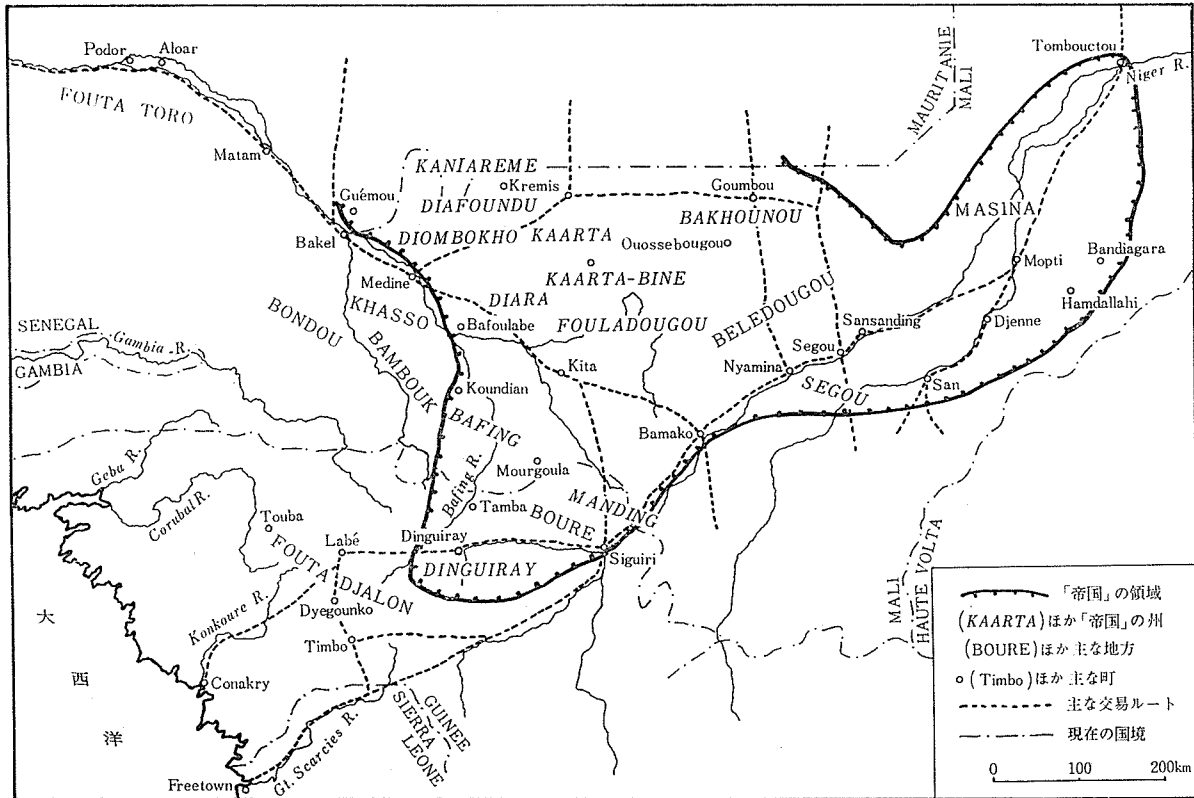
ウマルの初期の目的がセネガンビア地方に自らの理想とするようなイスラム神権国家を樹立することにあつた点については、その初期の活動がセネガル河の支流、バフィン Bafing 川流域のバムブク Bambuk 地方を北上し、カソ Khasso 地方からフーター・トロへ向けられていたことより明らかである。ウマルの場合は前章のウスマーンと異なり、明確なジハード宣言が既成のイスラム勢力に対して発せられた証拠は残っていない。それは、ウマルの時代はすでにヨーロッパ植民地主義勢力との軍事的衝突に必然的に巻きこまれ、^⑦したがって彼は両面の敵を抱えざるを得なかったことによるだろう。

一八五四年ウマルは Bambuk に侵攻せらるゝ Khasso に進み、一八五五年にフランスの交易基地バケル Bakel を襲つた。その際にフランスに対して貢納を要求し拒否の場合に攻撃するの戦闘宣言を、ジハード宣言と認める説もあるが、Oloruntimehin によればその考えは否定される。当時、フランスはアルジェリア征服を指揮した L. Faucherbe をセネガル総督に起用し強固な反イスラム政策をとり、セネガル川上流にメディヌ Medicine 砦を建設し Khasso をうかがつた。ウマルとフランスとの最初の大規模な戦闘はこの砦をめぐる行われ、稜堡を備え曲射砲で防備した砦を、一八五七年一万五千のウマル軍は三ヶ月にわたり攻めつづけ八千を失つたあげく撃退された。しかし、フランス側の記録には、ウマル軍について、「彼らはあたかも殉死のように、我々の銃火に向かって進んでくる」^⑧とその参加者の宗教的情熱を証言している。この敗北後、ウマルのセネガンビア地方の支配の望みは失われ、一八五九年の Matam と Guemu のフランスの砦の攻撃を最後に、ニジェル川流域地方へ転進した。また、一八六〇年にはフランスとウマルの間に休戦協定が調定され、その主内容は互いの勢力範囲の境界をセネガル川とバフィン川とを結ぶ線に設定することになった。

ウマルのニジェル川流域地方の非イスラム諸国家や既存のイスラム国家の征服の過程を略述すると以下のようになる。すでに一八五五年、ウマルはカールタ Kaarta 地方へ進攻しているが、従来その地方においてはバンバラ Bambara 族による王国形成が Segar 地方とともに十八世紀よりおこなわれていた。^⑨これらのバンバラ王国内ではイスラムに寛容であ

り、^⑨ニジール河畔の Segu, Jenne. Sansanding などの商業都市においてはイスラム文化の繁栄が享受されていた。しかしウマルの攻撃はそうした事情を斟酌することなく、一八六〇年 Nyamina, Sansanding を陥し、ついで Segu をうかがった。Segu は北方のマッシーナの援軍を得たにもかかわらず、一八六一年に陥落したが、ウマルの言によれば、「Sansanding や Segu の住民は異教徒 *kafir* である。なぜなら、これらの町を占領した時、彼らはまだ偶像崇拜をおこなっていた」としてこれらの戦いが正当化されたのである。さらに、マッシーナのイスラム国家の Ahmadu 朝への攻撃に進んだ際、マッシーナ王はウマルをムスリム同胞に対する攻撃のゆえに論難を加えたにもかかわらず、ウマルはジハードの論理で論駁した。つまり、異教徒の Segu と同盟したこと、さらにウマルじしんの権威へ挑戦したこと二点により、「たとえムスリムであるといっても、異教徒のみがする行為を犯したことにより異教徒であり、それゆえ Ahmadu がイスラムに改宗したと主張している人々もまた異教徒である」と返答している。かくして、一八六二年マッシーナを征服、翌年さらに Timbuktu に貢納を要求するに至り、この時点でウマルの獲得した支配領域は、西は Dinguiray から東はマッシーナに至った。

R. Willis の見解では、この広大な空間を統合する紐帯が、ティジャニーヤとしての宗教的連帯感とウマルの権威に対する忠誠にあったことは疑いはない。^⑩しかしながら、その領域の支配統治は必ずしも安定したものとはいえなかった。であり、実際にはつぎのような形態がとられた。ジハードによる征服を続行する過程では、征服地は軍管区的性格を必然的に帯びたが、一八五五年 Kaarta 地方を支配した時点では、Koniakary, Dialounou, Kaniareme, Yoguire, Diala, Kaarta Bine, Guenoukoura, Diagounte, Bakhounou の九地区が、それぞれ軍事指揮官としての *katibé* 支配に委ねられ、それを Nioro の Alfa Umar が統轄していた。^⑪ついで Segu 王国を征服するやそれを五分し、それぞれを主要な軍団(後述する)の支配に委ねた。^⑫さらに、征服が一応終了した段階には、その支配領域全体は十二の州 province に分割されたが、それらは西より Dinguiray (首都も同名称) Bafing (Koundian), Manding (Mourgonla), Fuladugu, Kaarta-



第2図 Tukolor「帝国」の領域

Bine (Farabougou), Bakhounou, Kaarta (Nioro), Diafounou, Diombokho (Konikari), Kanitareme, Diala, Segu (Segu), の十二があげられる。各々には toroBe 階層より出た首長が置かれたが、これらの州の領域設定には旧来の地方的な政治領域が踏襲されたことは明白であり、またたとえば Kaarta と Kaarta-Bine との間に黒い小石の境界が敷かれたという事実が示しているように、行政区域の画定への意欲をもうかがうことができるのである。そして、前章のウスマーンの場合と同様に、領域の防衛・治安の確保を意図した *ribati* が戦略的重要地点に建設されたが、その主要なものを挙げると Bambuk 地方の Koundian、Kita 地方の Moungoula、Kkasso 地方の Konikary, Sabousire、Kaarta 地方の Nioro などであり、この中には州の首邑も含まれる場合がある。

しかしながらこのような支配領域の安定を求める努力にもかかわらず、以下に略述するようなウマルの運動が当初から抱えていた内部的矛盾のゆえに、トックロール「帝国」の瓦解も早かったのである。

2 トックロール「帝国」の内外的矛盾

Orunimehin はウマルの率いた運動に参加した人々を二類型に区分している。つまり、理想的なイスラムの復興に献身する第一のタイプに対し、第二のタイプはイスラム改革よりもむしろフータ・トロ社会の拡大を考える第二のタイプが設定される。そして、後者は元来狭小なセネガル河谷を居住地とするトックロール族にとって文化的伝統ともいべき移住の延長線にあるというのである。もちろん、宗教的情熱にかられて参加した人々の存在は無視できないのはいうまでもない。しかし、ウマルの運動の軍事的側面の分析すれば、第二の型を過少評価し無視するのは危険であろう。というのは Dyegoumko や Dinguiray の *zawiya* における軍事力養成の時期において、ウマルの積極的な支持者はフータ・トロより参集した *talibé* 階層であり、彼らはおのおのの故郷において形成していた地縁的クランにもとづきウマル軍の小隊を形成したのであった。ウマルの軍隊構成は、こうした地域集団に基礎を置く軍団からなり、初期には次の五軍団が数えられていた。フータ・トロ地方の N'Guenar, Bosseia, Worgo 出身者からなる軍団、Irlabe 地方の Lao, Ebiabe の軍団、Toro,

Bondu 地方出身者の軍団、フータ・トロ、ハウサ地方のフラニ族により構成される近衛軍団、そしてフータ・トロ地方の指導者の Alia Uthman の軍団、がそれらである。さらに、征服の進展とともに異部族も傘下に入り、またフータ・ジャロン地方のフラニ族の多数の参加が見られたが、それらは各軍団のいずれかに編入された。ウマル軍の構成において *talibé* は銃装の騎兵としてその中核となり、フラニも予備騎兵隊を組織したが、新たにイスラムに改宗した被征服民は歩兵を構成した^②。また、Kaarta 攻略の際にみられるような軍事的危機の際には、フータ・トロ、フータ・ジャロン地方から援軍が派遣されたのである。かくして、ウマルのジハードにおける軍事活動は、フータ・トロ地方の地域的集団と社会階層とからなる社会構成を、そのまま移譲した形で行われたというのも過言ではないのである。そしてまた、広大な領域を形成後においても、その支配統治のシステムは *toroBe*, *talibé* 階層の起用にみられるごとく、故地であるフータ・トロの社会構成を受けつぐことによって完成していたのであった。

しかるに、ウマルのあまりに早過ぎた天逝が、その「帝国」が抱えていた内外的混乱をいっそう助長させた。彼はマッシーナのムスリム・フラニの反乱鎮圧の際、一八六四年に Hamdallahi において戦死した。ウマルの夭折はその後継者をめぐる抗争を生んだが、その第一の理由は生前に後継の指名を受けた長子のアフマド Ahmadu は、ウマルが備えたカリスマ的権威 *bakara* を欠かしていたこと^③にあった。ウマル個人に寄せられていた宗教的・政治的熱情は、アフマドの行った *amir al-mu'minin* 即位式にモロッコから *sharif* を招くことにより権威を付与せんとした試み^④にもかかわらず、もはや回復されることはなかった。ウマルの親族内外においてすら分裂がもたらされ、アフマドの兄弟のうち Aguibu は Dinguiray 地方を、Moktar は Dionboko 地方に割拠、さらに他の異母兄弟も各地に分立するや、ウマルの築きあげた中央集権体制は崩壊をきたした。

一方、軍の内部においても深刻な対立が表面化した。それは Segu 征服のあとバンバラ王国の *sofo* 職業軍人層の軍への組み入れに由来していた。次第に彼らが軍の重要部分を構成するに及び、*talibé* 階層の勢力の弱体化を意図したアフ

マドは、*sofa* 指導者層に州や地区の支配を委ねた。この事態は既述のフータ・トロ拡派ともいうべき集団とアフマドとの亀裂を決定的にし、彼ら *tulbe* 階層はフータ・トロへ帰還する動きを示すに至り、それはトックロール「帝国」の軍事的側面の弱体化を招くに至った。^④ フータ・トロやフータ・ジャロン地方の支配層はアギブに加担しアフマドに対抗する動向を示したが、アフマドは *sofa* を掌握しその軍事的勢力を背景として中央集権の回復に努力したため、一八七〇年代末には各地の反乱もおさまり一時的に小康を保った。

しかし、Boledugu 地方におけるハンバラ族の反乱が恒久化するに従い、Segu と Karta とが分断されるに至り、今やトックロール「帝国」の領域は大別して四部分に分割される事態を迎えたが、それは次のような状態であった。Segu 地方においてはようやくアフマドの支配が貫徹されたが、マッシーナはウマルの甥 Tijani の支配下に入り独立した領域を形成した。Kaarta, Dinguiraye 地方においてもそれぞれアフマドの弟たちが独自の支配領域を形成した。かくして一八八〇年代に入ると、もはやウマルの構築したトックロール「帝国」はその実質的な領域を失うに至った。

- ④ Umar の事蹟に關する伝承は、この公認の著者 M. A. Tyan, (1935) *La Vie de el Hadj Umar*. tr. H. Gaden, *Mémoires de l'Institut d'Ethnologie*, no. 21, Paris.
- ⑤ 最近の最も包括的な研究は Oloruntimehin の著 *Umar's Works and Writings*. B. O. Oloruntimehin, (1972) *The Segu Tubulor Empire*. Ibadan History Series, London.
- ⑥ 事実上 *khalfu* には、*muqaddam* (*sif* にあける教団支部を預ける *shikh*) と任命されたもの、西マッシーナに誇大に伝えられたところ、J.M. Abun-Nasr, (1965) *The Tjaniyya, A Sufi Order in the Modern World*. Oxford Univ. Press, p. 108.
- ⑦ C. Clapperton の Sokoto 滞在時、宗教的指導者としての自負を感ずる Umar の金品の模様を印象的に記している。C. Clapperton, (1824) *Journal of a second Expedition into the interior of Africa*. London, p. 202.
- ⑧ J. S. Trimmingham, (1962) *A History of Islam in West Africa*. Oxford Univ. Press, p. 157.
- ⑨ Abun-Nasr, J.M. (1962) *Some Aspects of the 'Umar Branch of the Tijaniyya*. *Jour. of African History*, 3-2, p. 329. 周知のムハリヤクニヤバ' ニーンド布告の過程は、ムハリヤクニヤバ' 須の段階による。R. Levy, (1957) *The Social Structure of Islam*. London p. 5.
- ⑩ B. O. Oloruntimehin, op. cit., p. 43.
- ⑪ Umar のハンバラ族の軍事的・外交的關係については以下の研究が参考となる。J. D. Hargreaves, (1966) *The Tokolor Empire of*

- Ségou and its Relations with the French. Boston University *Papers on African History*, vol. II. Boston. A. S. Kanya-Forsner (1971) Mali-Tukulor. *West African Resistance, The military response to colonial occupation*, M. Crowder (ed.), London.— (1969) *The Conquest of the Western Sudan, A Study in French Military Imperialism*. Cambridge.
- ㉔ B. O. Oloruntimehin, op. cit., p. 57.
- ㉕ J. D. Hargreaves, (1963) *Prelude to the Partition of West Africa*. London p. 100.
- ㉖ W. R. Wood, (1967) An Archaeological Appraisal of Early European Settlements in the Senegambia. *Journal of African History*, VIII-1. pp. 52-53.
- ㉗ A.S.Kanya-Forsner (1971) op. cit., p. 57.
- ㉘ C. Monteil (1924) *Les Bambara du Ségou et au Kaarta*. Paris. p. 23.
- ㉙ 原 op. cit., p. 153.
- ㉚ J. M. Abu-Nasr. (1965) p. 123.
- ㉛ ibid., pp. 122-123.
- ㉜ R. Willis, (1967) Jihad fi Sabih Allah-its doctrinal basis in Islam and some aspects of its Revolution in 19th century. *Jour. of African History*, VIII.
- ㉝ B. O. Oloruntimehin, op. cit., p. 152.
- ㉞ B. O. Oloruntimehin, op. cit., p. 152.
- ㉟ Y. J. S. Martin, op. cit., pp. 80-81.
- ㊱ ibid., p. 81.
- ㊲ G. Balandier (1959). *L'Afrique ambiguë* 『赤い熱帯の火』(講座 現代学) 講談社 pp. 55, 80 B. O. Oloruntimehin, op. cit., p. 153, Y. J. S. Martin, op. cit., p. 86.
- ㊳ Oloruntimehin, op. cit., p. 56.
- ㊴ M. A. Tyam, op. cit., p. 148.
- ㊵ Kanya-Forsner, op. cit., p. 56.
- ㊶ M. Weber の『経済と社会』の『経済学』と『社会学』の概念を参照せよ。M. Weber 『支配の諸類型』(世良忠邦訳) 創文社。pp. 80-84.
- ㊷ ヲルンティン自身の *mahdi* とは「マハディ」一般の意味であると期待されたように、原を指摘すると「マハディ」である。原 op. cit., p. 152.
- ㊸ また、ウマルがティンジャーの *khalf* と過大視されたように、彼自身のメッカよりの掃略の行動も、意識するしなごかかわり、ウマルの期待がうかがえるのである。
- ㊹ B. O. Oloruntimehin, op. cit., pp. 179-180.
- ㊺ 一八六六年には、エタンロ軍の精成兵 *tahé* が四〇〇〇 *sofa* といふ〇〇名にたふさへ。Kanya-Forsner op. cit., p. 61.

4. サモリ・トゥーレによる軍事的征服の領域的展開

1 デュラ革命の背景

サモリ・トゥーレ^① Samory Turé (Samory b. Lāhya Turé) が、フランス植民地主義の侵略と抵抗に際し示した軍事的才能は、彼を「スーダンのボナバルト」^②とか「血に飢えたサモリ」^③とかの形容を与えた。その一方では、アフリカ民族主義の興隆とともに、サモリの業績はアフリカ社会が侵略者に対しておこなった「最後の企て」^④として再評価も試みられている。ところで、彼のようないわば歴史的個性の出現が偶然のものではなく、その属するマンディングゴの社会の時代的要請から生まれたと考えるのは蓋し当然であろう。そのため、彼を生んだマンディングゴ社会について略述すると、もともとそれは西アフリカにおける有数の大言語集団の総称であるが、彼らは十三〜十四世紀の古マリ王国の末裔であることをアイデンティティの基盤として深い文化的統一を達成していたとされる^⑤。しかしながらマリ王国の瓦解後、彼らを統合する政治組織は生まれず、小規模な政治的集団の分立にとどまった^⑦。マンディングゴの社会は、大別して自由民 *boron*、奴隸 *dyon*、カースト的職業集団 *jeli*, *munun* など、からなる階層化を遂げたが、政治的単位は *kafu* と称される数個の村落の連合の規模にとどまった。 *kafu* の首長は支配的クランから選出され *masa* と称された^⑧。 *kafu* はまた危機の際には軍事単位となり、 *masa* はそうした際に軍事指導者 *kalehigi* を任命し、彼は各村落にもともとなる年齢集団の枠内で兵員を動員した^⑨。

総じてマンディングゴ諸族は十九世紀半ばまで、大西洋岸、ギニア湾岸また地中海岸と交易を通じて接触を持ちつつ、植民地主義勢力の浸透やイスラム改革運動に伴う政治的混乱から免がれていた感がある。しかし、そうしたマンディングゴ社会の安定も、デュラ *Dyula* 革命と称される政治的・経済的運動により、主として内部から打破された。デュラ族はマンディングゴ諸族に属す、長距離交易に専門化したムスリム商人の集団であり、主としてサハラの岩塩と森林のコーラ *Kola*

実との交易に従事し、南北の交易ルート上の各地に点々と商業都市 Dyula Town を形成していた^①。フータ・ジャロンやフータ・トロ地方のイスラム改革に基盤を置く国家形成の動きに対して、敏感に反応したのがこれらのデュラ商人であり、その中でもニシエル川上流の主要な Dyula Town の Kankan であつた。Kankan のアラブ人のひとり Mori-Uie Sise という人物が最初の運動の起点となつたが、彼はフータ・ジャロンにおけるムスリム集団ジャカンケ Jakhanké 族の地に滞在中に教義を学び、一八三五年頃 Konyan 地方と Toro 地方との間に *zawaya* を建設しハードを開始した。そして、近傍の *kafu* を征服し Morinledugu なる小国家を形成したが、この国家は画期的な軍隊組織を生み出すことによつて、後代の運動に影響するところが多い。それは従来年齢集団の枠内の徴集を廃し、出自にかかわらず *sé* (語源的には脚の意。一〇人隊)、*bolo* (腕の意。一〇〇～二〇〇人隊) からなる常備軍を組織し、銃を装備しさらに各指揮官にはウマを与えるというものであつた^②。この Sise の運動は、ニシエル川上流地方に新たな動揺をもたらし、後のサモリを生むいわば触媒となつたとされる^③。また Sise とサモリとの間の時代にも、Odieme 地方の Ture や Milo 河谷地方の Berete などの新興小国家がデュラ族による形成が、やはり Sise に刺激されて起こつたのである。このようなデュラによる政治的勢力の拡大は、交易商人としての彼らの立場が、ヨーロッパの銃・火薬の輸入によつて従来戦闘の形態の変化への即応を容易にし、その社会的地位を急激に高めていたことにもとづくのはいうまでもない。

2 軍事的征服による領域の形成

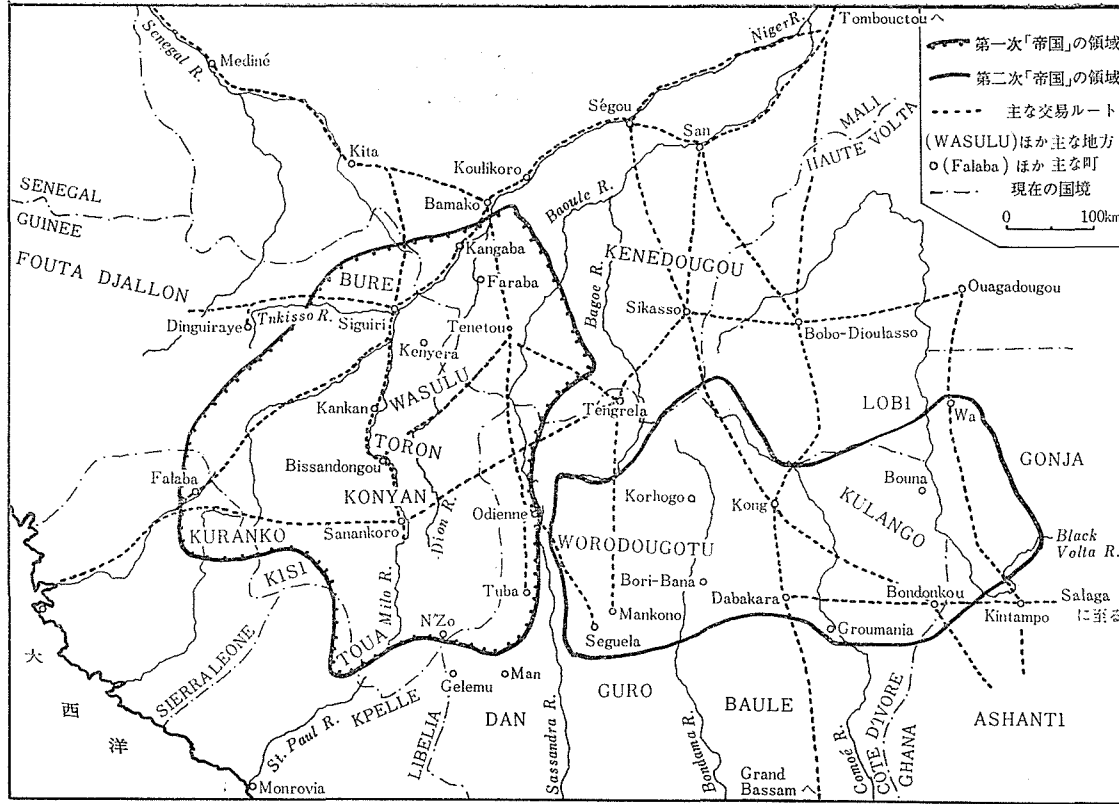
サモリは一八三〇年頃、Kankan 南東の Sanankoro に生れ、その母方の家系は地方の有力な Kamara クランに属した。もともとこの Konyan 地方は、マンディンゴの一支族 Konyanke の居住地であつたが、大西洋岸のイギリス交易基地 Monrovia との接触や、南の森林地帯の Toma, Dan, Guro などのユーラ実産地との接触より交易の要地となりデュラを吸引した。サモリの属ストゥール Ture 家系もそうしたデュラのひとつであり、サモリ自身も青年期には交易に従事したが、一八五三年頃 Sanankoro が前述の Sise により征服されるに及び母が奴隷となり彼もその軍に編入された。サ

モリは七年間の幽囚の間に軍事的才能を發揮しその地位を上昇し母の解放を獲得して、さらに Toron 地方の軍事指導者 *keteligi* に任命され、ついでその勢力を Mito 川から Dyon 川にかけての地方に拡げた。初期においてサモリの軍事的勢力の拡大活動は、ニシエル上流地方で最大の勢力を築いた Sise との共同歩調をとった。そして、Bisandungu を拠点として Toron から Konyan 地方を支配し、交易を通じてウマ・火器の蓄積に努めた。この時点におけるサモリの活動がイスラム宗教運動に基盤を置く性格を有するものかについての確実な証拠はない。むしろ基本的には、地方の政治的首長の交易キャラバンに対する略奪からデュラを保護することによって、デュラ交易商人の支持を得ていたと考えられる。サモリの勢力拡大の為に最大の障害であった Kankan の Sise に対して攻撃を加えたのは一八七八年のことであり、一八八〇年に Kankan 攻略が成るや、サモリはアルマニ *almany* の称号を名のった。このカーディリーヤ派イスラムの大拠点である Kankan 征服の意味は、その地の聖職者層の吸引によって、サモリの政治権力が宗教的支持をとりつけることに成功し、その支配体制はイスラム神権国家の形態を整えることになった。

従来より、サモリの運動の性格についてイスラム宗教運動との関わりが論議されるところであるが、たとえば Binger や A. Gouilly の否定的見解に対して、J. D. Hargreaves はそれらの見解が余りに懷疑的に過ぎると弁護を行っている^②。確かに、サモリの運動の経過には明確なジハード宣言もみられない。しかし、サモリの宗教的情熱に対しては当時直面したフランス軍司令官 Peroz の証言にもみられるように、村落の聖なる樹を伐り倒し、数々の儀礼を破壊したと、広場にコーラン学校やモスクを建設した事実が知られているのである。最近の G. C. Hemasia の見解では、サモリが少くともイスラムの *idion* を国家形成の目的のために利用したことは疑いの余地はないとされている^③。

3 征服領域の構造とその移動

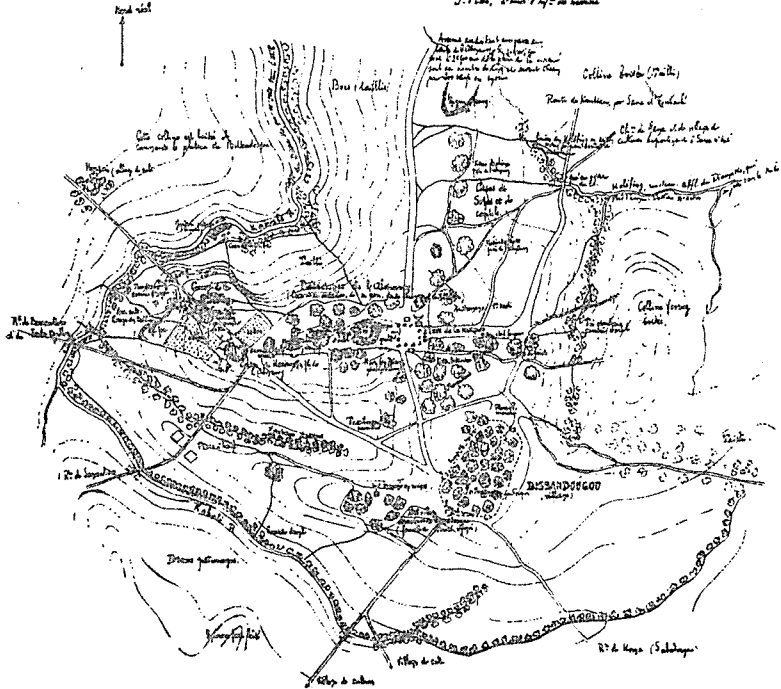
サモリが Kankan 征服後の時点で形成した政治的領域——しばしばマンディンカ「帝国」と称される——は、本格的な支配体制を整備する段階で、ヨーロッパとくにフランス植民地主義勢力のスーダン内陸部侵攻政策と衝突したことによ



第3図 Mandinka「帝国」の領域

Mission des Ouzboulou
 cap. Peroz, chef de mission.
 Plan de Bissandougou
 E. 1:10000

S. Nat. 1890-1891



第4図 Bissandugu (第一次「帝国」の首邑) [Peroz による]

り、両者の軍事・外交関係によって領域そのものの展開が左右された点に最も特徴的な性格がある。通常、Bissandugu を首邑とし Milio 川流域の Konyan, Toron, Wasulu 地方を領域の核心とした時期を第一次「帝国」、そして一八九四年以降東遷し Dabakara を首邑とし Djimini Diamala 地方を核とした時期を第二次「帝国」と区分される。第一次・第二次を問わず、マンディンカ「帝国」の領域は外庄との恒常的抗争や、じしんの軍事的征服のために不安定であった。しかし、特にその前半においては、征服地の直接的支配をめざした意図はじゅうぶんにかがいでるのである。

一八八七年の時点における Peroz の観察によれば、サモリの国家体制

は古マリ王国のそれを踏襲するところがあるといひ、その末端の単位は村落 *angru* であり、それらは一六二の郡 *kafu* にまとめられた。各郡は二十前後の村落を含み、その首長はマンディンゴの従来の慣習どおり主要クランから選ばれたが、首長を補佐する形で二名の軍人が中央から派遣された。さらに郡は十の州に統轄されたが、その首長にはサモリの近親や譜代が就任した。^{②③} 「帝国」の核心地域 (Konyan, Toron など) は直轄地として徴税を免がれたという。州の首長を補佐するために、サモリが直接任命する軍事指導者 *helatigi* が置かれた。

マンディンカ「帝国」の制度についての資料はこの Peroz の記述以上のものが今のところないが、Y. Person はそれをトゥッコルの制度と類似すると見なしている。^④ サモリの支配統治の組織は、それに先立つ *Uise* の征服地の郡 *kafu* に軍事官 *dinguhunustigi* を置く制度に比し、いっそう軍事体制に即応したものであった。マンディンカ「帝国」の軍隊組織の分析はその事情を明確に語るが、M. Legassick によれば一八八七年においては次の四種の構成がみられた。^⑤ それらは正規軍、予備隊、分遣隊、騎兵隊であり、正規軍は主に奴隸の身分で銃装の歩兵 *sofa* から構成され、一〇ないし二〇人単位 (*ku*) に組織されて州の *helatigi* の指揮下に入った。自らウマを持ち銃・剣装備で自発的に参加した分遣隊は直接サモリの指揮下に入った。予備隊は、各村落から一〇人に一人の割の徴集兵 *kunustigi* から成り、州の *helatigi* の指揮下に置かれたが、軍事危機の際には徴集率は二人に一人の割合に高められたという。こうして州はサモリにより任命された *helatigi* に支配される軍管区的性格を強く帯び、その支配領域における政治的・経済的活動の責務を負担していた。^⑥ その動員能力は平均五、〇〇〇人であり、その数は後半期においても大差がなく、また核心地域 (*foroba* と称された) には八、〇〇〇ないし一〇、〇〇〇の常備軍が維持されたという。^⑦

マンディンカ「帝国」の支配領域の軍事的性格の実態を証言するのは、その後半期に通過したフランス人 J.-G. Binger の観察である。^⑧ それによれば四〇〇キロメートルの行程で見た七十二の村落のうち約半数は廢墟であった。そして、残りの村落の総人口を四二〇〇、そのうち五〇〇〜八〇〇〇人の村落は三、一五〇〜三〇〇〇人が七、六〇〜一〇〇〇人を五、二〇

五〇人を十七、二〇人以下を四と推定し、さらに「帝国」の人口密度を一平方キロメートル当り二人と推計している。こうして「帝国」の軍事的体制がその領域内部の村落をいたく荒廃させていた事実がこの記述からも知り得るのである。いっぽうでは軍隊の徴集システムにあらわれるごとく、その領域支配は村落レベルに直接及んだのであった。

また、既述のごとく、マンディンカ「帝国」の軍事的支配の性格は、その領域移動の点で最も特徴的に表われるが、フランスとの戦闘経過とそれに伴う領域の変転は以下のように概略できる。セネガル川を溯行し内陸に進攻を続けたフランスとサモリとの最初の軍事的衝突は、一八八二年 Wasulu 北方の軍事的要衝 Kenyan をめぐっておこなわれた。当時すでに新植民地総督 B. Desbordes の方針でニジェル上流地方への侵攻を開始しており、翌年の Banako (現在マリ共和国の首都。当時は交易の要衝であった) 争奪戦では、サモリの弟 Keme-Brema の軍団が数的に圧倒したにもかかわらず敗北に終わっている。この敗戦以後、サモリの戦略は正面戦を回避し、殆んどすべての戦闘で敗退しつつも余力を残し、焦土作戦を取りながら新しい地方に転進する形態をとった。いわばゲリラ戦の泥沼に敵を引きずり込むこの戦術は、西アフリカにおける植民地勢力に対する抵抗戦争が一回の激しい総力戦で終るのが通常であったのに比し稀有の例であった。ニジェル河流域地方への進路を阻まれたサモリは、フランスの庄迫の強い Buré 金産地を放棄し、東方の Kenedugu 地方をうかがった。Kenedugu のシカソ Sikasso 王国はセヌフォ Senulo 族により建設された囲壁を持つ都市 Sikasso を首邑とした王国であり、その首長 Tieba はサモリとの対抗上フランスと同盟を締結した。一八八七年より開始されたシカソ攻撃は、この同盟により両面作戦を強いられることにより失敗に帰した。さらに、一八九〇年にトゥクロル「帝国」の首邑 Segu 占領に成功したフランスが、計略の方向をサモリに向け翌年には第一次「帝国」の首邑 Bissandugu を陥した。これによって、サモリはフランスと Bissandugu 条約^⑤を締結するに及び、その領域の西半を失うにいたったが、同時に一時的に戦闘は中断された。

このちサモリの進出の方向はデュラ交易商人の交易網の張りめぐらされた東方に必然的に向った。一八九五年にはデ

キラ・タウンのひとへ Bonduku に入り、さらにブラック・ボルタ Black Volta 川を越えコンジヤ Gonja 地方西部に侵攻するに至った。そして Dymini, Dyamala 地方を中心とした領域の再建を目指し、息子の Sarankye-Mori の軍団を Bole, Wa, Buna, Lobi などの地方に派遣した。この時期のサモリの方策には、デュラ・タウンを核とした地方権力との同盟・連合を求める意図が顕著に表われている。その受け入れ側の態度については、最大のデュラ・タウンである Kong のウラマー *ulama* が Bonduku, Buna の同胞にイマーム *imam* であるサモリを受け入れそのジハードを平和裡に受け入れるように要請した書簡に示されている。^④ このように第二次マンデインカ「帝国」は、デュラの築きあげた交易ネットワークを基盤とした領域形成に着手したが、時はすでに列強の本格的なアフリカ分割の時代に入っていた。

アシャンティ Ashanti の支配を一八九六年に完了したイギリスはさらに北進を意図した拡大策をとり、いっほうフランスもシカンとの同盟を解消し一八九八年に征服、さらに Bobo-Dioulasso を陥落し南進をはかった。こうして、南北両面よりの植民地主義勢力の侵攻により、サモリはまたもや西方の Toma 地方への転進をはかったが、Dan 山地でのフランス軍との遭遇戦を最後にその命脈はついでたのであった。

- ① サモリの運動全体については、次のような研究が主として利用可能である。Y. Person (1963) *Les ancêtres Samori. Cahiers d'études africain*, 13-4, pp. 125-156. —— (1967) *L'Empire de Samori, Selon Peloz. Notes Africaines*, N 113, p. 31. —— (1967) *Samori et la Sierra Leone. Cahiers d'études africain*, 25, pp. 5-26. —— (1971) *Guinea-Samori. West African Resistance, The military response to colonial occupation*, M. Crowder (ed.), pp. 111-143. —— (1970) *Samori and Resistance to the French. Protest and Power in Black Africa*, R. I. Rotberg and A. A. Mazrui (eds.), Oxford Univ. Press, pp. 80-112. G. C. Ifemasia (1965) *A Note on Samori Ture. A Thousand Years of West African History*, J. F. Ajayi & I. Espie (eds.), Ibadan pp. 283-288. M. Legassick (1966) *Firearms, Horses and Samorian Army Organization 1870-1898. Jour. of African History*, 4-1, pp. 95-115. ② E. Peroz (1896), *Au Soudan Français*, Paris. ③ G. Duboc. (1974) *Samory le sanghaï*, Paris. ④ Y. Monteil, (1971) *L'Islam Noir*, Paris, p. 112. ⑤ フランスの進派のキリスト共和国の Seku Ture が自ら、Samory の後継と称して、その行った詳細の表現を著せられた。M. Crowder, (1971) *West African Resistance* London, p. 17. Samory に対するヨーロッパ側の見方の一面性については、伝承研究のトローチを取った Holden の著述を参照。J. Holden, (1970)

- The Samorian impact on Buna: an Essay in Methodology, *African Perspectives, Papers in the History, Politics and Economics of Africa, Presented to Thomas Hodgkin*. C. Allen & R. W. Johnson (eds.) Cambridge Univ. Press. pp. 85-86.
- ⑥ G. Dieterlen, (1955) Mythe et organisation sociale au Soudan français. *Journal de la Société des Africanistes* XXV. pp. 39.
- ⑦ 一八世紀末から十九世紀前半にかけて Senegal 原土族一 Niger 原土族双方を接続した記録は、小規模な地方酋長の分枝状態を明らかにする。M. Park (1816) *Travels in the Interior District of Africa, 1795, 1796 and 1797*. vol. 1. 2. London. M. G. Gray (1825) *Travels in Western Africa*. 1818-19-20 and 11. London. R. Caillie (1830) *Travels through Central Africa to Timbuctoo, 1824-1828*. vol. 1. London. repr. 1968.
- ⑧ *masse* は Mali 王国の歴史を論ずる上で重要な諸概念をなす。N. Levtzion, (1963) The 13th and 14th century Kings of Mali. *Journal of African History*, IV-3. p. 341.
- ⑨ Y. Person (1971) op. cit., p. 116.
- ⑩ Dyuula 社会は西アフリカの西アフリカの Y. Person の著述を参照せよ。Y. Person, (1974) The Atlantic coast and the southern savannah, 1800-1880. *History of West Africa*. vol. II. J. F. A. Ajayi M. Crowder (eds.), London pp. 290-301.
- ⑪ Dyuula Town の歴史は、結果的に別種を相違なくする。A Note on Dyuula Towns; Culture and Society of Traders in West Africa. K. U. A. S. vol. X (1975) 参照。
- ⑫ Mandingo の風俗 Dyakhanke は、ノース・サハラに Dyuula 社会を形成した交易に従事したグループに由来した。J. Suret-Canale, (1970) Touba in Guinea—Holy place of Islam. *African Perspectives*. C. Allen & R. W. Johnson (eds.) Cambridge, p. 55.
- ⑬ Sise の歴史は Binger の著述を参照せよ。L-G. Binger (1892). *Du Niger au Golfe de Guinée*. T. I. Paris.
- ⑭ M. Legassick. op. cit., p. 98.
- ⑮ Y. Person (1971) op. cit., p. 117.
- ⑯ *ibid.*, p. 119.
- ⑰ *ibid.*, p. 119.
- ⑱ Y. Person, (1963) op. cit., pp. 143-146.
- ⑲ Y. Person, (1962), La Jeunesse de Samori. *Revue française d'histoire d'Ouatre Mer*, Paris
- ⑳ L-G. Binger. op. cit., pp. 144-145.
- ㉑ *masse* *timbu* は、西アフリカの歴史を論ずる上で重要な諸概念をなす。E. Peroz, op. cit., pp. 414-115.
- ㉒ G. C. Ifemasia, op. cit., pp. 283, 286.
- ㉓ J. B. Webster & A. A. Boahen, (1967) *The Growth of African Civilization, The Revolutionary Years West Africa since 1800*, London pp. 46-60. *masse* は、一八四二年から第一期一八七二—一八九四年を第二期、一八九五年以後を第三期に分けて、M. Legassick, op. cit., p. 96.
- ㉔ Mali 王国の歴史の詳細な研究は、M. Legassick の *Levtzion* の著述を参照せよ。N. Levtzion (1973) *Ancient Ghana and Mali*, New York.
- ㉕ Legassick は、最初七の州からなる西アフリカの歴史を論ずる。M. Legassick, op. cit., p. 96.

- ⑳ E. Peroz, op. cit., pp. 400-416.
- ㉑ Y. Person (1971) op. cit., p. 124.
- ㉒ M. Legassick, op. cit., pp. 96-99.
- ㉓ Y. Person, op. cit., p. 124.
- ㉔ *ibid.*, p. 125.
- ㉕ I.-G. Binger, op. cit., p. 122.
- ㉖ J.-B. Webster & A. A. Bohlen, op. cit., p. 55.
- ㉗ J.-C. Arnaud et H. Berron (1971), Aspects historiques de quatre villes du Soudan. *Bulletin de l'Institut de l'histoire de l'Afrique de l'Université de Montréal*, 1971/2 pp. 55-56.
- ㉘ この条約の主内容はニシホル左岸をフランスに譲るものであった。その先年、一八八六年の *Kembakoura* 条約（通称 *Niagassola* 条約と称されるが）では、サモリはフランスと一四条にわたる条項を締結している。その内容は両者の勢力の境界、相互の安全保障、そして交易商人の保護や関税に関するものの、三つの問題に關してゐた。B. O. Olorunmehin (1969), *The Treaty of Niagassola, 1886 An Episode in Franco-Samori Relations in the Era of the Scramble*. *Journal of the Historical Society of Nigeria*, vol. IV No. 4 pp. 606-608.
- ㉙ J. Holden, op. cit., p. 83.

5 十九世紀西スーダンの政治的領域の特質

十九世紀西スーダンにおいて繰り広げられた三様の政治的領域を、従来のアフリカ国家研究との関連で検討すればおおよそつぎのとおりに整理できよう。

Vansina はこれらをもはや王が聖なるもの *Sacred King* でなく、支配のシステムもイスラムに規範を置くことにより特別のカテゴリに置くことを提唱している。従来アフリカの国家については王の權威の背景が問題にされたが、それはいわゆる未開国家では政治組織の正当性が呪術・宗教的な背景において承認され、政治組織の構成要素の中心を占める王がその下部組織に対する統合機能は、王がその価値体系の中心であるかどうかにかかっているからであった。②③。すでに見ることくウスマーン・ダン・フォディオ、アル・ハジ・ウマル、そしてサモリ・トゥーレの三者はいずれも卓越したカリスマ的權威を帯びた指導者であったが、その權威は生得的に賦与されたものではなく、むしろ既存の權威——宗教的であれ政治的であれ——に対する批判に運動の出発点を置いたと考えられる。T. Hodgkin のいうように広義には、十九世紀の

イスラム改革運動あるいは復興運動は、かつてのマリヤンガイ王国におけるイスラムの伝統を復活することにより、イスラム聖職者層が以前に保持した政治的影響力の復権を目指すものであった。^③ ウスマーンやウマルの宗教的・政治的権威は、イスラム法を共通に遵守しイスラムを統合のイデオロギーとする支持者層により、イスラム国家 *dar al-Islam* の指導者 *amir al-muslimin* として忠誠が誓われることにより支持されたのであった。その際、十九世紀の時点の西スーダンのイスラム的風土において、イスラム聖職者の広汎な活動について考察が必要であろう。既述のごとく西スーダンでは早くからイスラムが流布したと考えられるフータ・トロ地方の聖職者 *ForoBe* の活動は、西スーダン全域に及んだのであり、たとえばウスマーンじしんもハウサ地方へのそうした移住者の七代目の子孫とされているのである。^④ かくしてイスラム聖職者の広汎な地域的活動は、交易商人の交易ネットワークに基づく移動、さらには遊牧民の移動等と相まって西スーダン社会の深層に流動性にささえられていたと考えられる。すでに述べたように、西スーダンのイスラム国家の形成が相互に刺激と交渉を有していたことや、広大な領域を展開せしめたことが、これらのうえに立ち理解できるのである。

ところで、ヨーロッパ列強のイデオロギーとしてのイスラムの意義が強調されるサモリの運動の場合、彼の権威が生まれる背景をのべるとヨーロッパの侵略・圧迫によりマンディンゴ族の弱小政治勢力の支配に弛緩・動揺をきたし、その際に社会的地位を向上しつつあったデュラ商人層の政治的要求により大きな政治的統治が希求されていたのであった。サモリはそうした状況下で個人的能力により、既存の小政治勢力の政治的・軍事的構造内で、いわば成り上りのな地位上昇を遂げ得た。そして、その背景にはデュラ商人層の支持とともに、彼の構築した軍事的性格の強い政治体制では *sovereign* を中心に能力に応じた地位上昇が約束された事情があり、彼らによりサモリの権威に対する支持がなされたのである。

一方 J. Goody はこういった十九世紀西スーダンの運動に関して、それはこのサバンナ地域の特色である侵略・征服・国家形成の伝統を継承したものであり、イスラムの影響の程度もこの文脈の中で考えねばならないことを指摘している。^⑤ これはたとえば M. Crowder におけるような全てをイスラム改革運動の産物とする性急な主張^⑥ に対するものであり、経

済的基盤・軍事制度・技術的水準などの重要性を示唆したものであった。Goodyの意見はあくまでアフリカ社会の内在的發展に重点を置き、これらの国家形成の運動を把握せんとする視点に立つ。それはまた運動の性格を画一的に把握するより、それぞれの変差を明らかにすることを要請しよう。確かにウスマーンらの指導者の権威は部族のレベルを越えた広汎な地域において承認されたが、それが包含する各々の部族の相互関係や社会構造の相異はその領域展開に異なる様相を呈したのである。それを要約すればつぎのようであろう。

ジハードにもとづき征服したハウサ諸王国の領域ならびに体制を篡奪することにより成立したフラニ「帝国」は、ジハードに参加した聖職者をエミールに置くエミレートの分立する構造を持った。そして、さらにエミレート内部には大小の属国が独自の領域を有して内包されていた。征服者のフラニは被征服者であるハウサのかつての支配層を放逐し、*shariki*の親族・寵臣や各エミールのそれらが、複雑な位階序列を持つ官僚として封土を保有した。この封土は囲壁を有する都市的集落（町）を中心として成立した。したがって領域の構造においては、「帝国」の首邑——各エミレートの首邑——各封土の中心となる町という形が支配が貫徹されていたのである。J. S. Colemanはアフリカの政治組織の四分類の中で、大規模集権国家の例としてこのフラニのエミレートを挙げているが、領域構造におけるいわば点的構造を否定しがたいであろう。

カリスマ的指導者ウマルの国家創設初期における死去に直面したトゥクロール「帝国」の場合、完全な領域支配の組織の確立は望み得なかった。ウマルの主たる支持者はフータ・トロにおける *toroBé*, *talibé* 階層であり、新たな領域支配の形態もこの旧来の社会成層の構造を移入しすぎなかった。*toroBé* はイスラム聖職者としてジハードに指導まに参加し、軍団長として権力を分有し、かつ新たな州の首長として地方統治を担った。*talibé* は地縁的つながりに基く分隊を擁してウマルの軍の主力を構成し、征服地における軍管区支配を委任された。しかし、トゥクロール「帝国」の場合は、フラニ「帝国」におけるような政治的特権階層が支配を貫徹し、さらに地方の行政組織と位階にもとづく官僚制を発達させるに

は及ばなかった。その統合の質はウマルの権威に依存するのみにとどまり、それゆえ後継者問題は直ちに地方の分立を露呈したのである。それはまた、ハウサ諸王国を下敷きにしたフラニ「帝国」とは異なり、トゥクロール「帝国」はまさにジハードによる征服が生んだ新たな政治的領域であったことを如実に示すだろう。

三番目の、マンディンゴ諸族の領域より出現したマンディンカ「帝国」には、他二者に比しより内在的契機が認められる。マンディンゴ諸族においては従来小首長国の分立にとどまり、貴族・戦士や官僚にもとづく階層はみられず政治権力の分化も進まなかった。こうしたマンディンゴ諸族の統合に成功したサモリは、したがってその領域支配はみずからの親族・譜代などによる直接的支配の形態をとらざるを得なかった。さらに加えて、恒常的に軍事的危機に包囲された状況が、軍事体制を「帝国」に強いることにより、軍事的徴発を通じた支配を村落レベルに及ぼすに至った。かくして、ここでは官僚制度・社会成層化を媒介とせず、他二者にはみられなかった一定程度の直接的支配をみるに至ったのである。

最後に、残された問題としてこれらの「帝国」の領域的展開を検討したいと考える。P. C. Lloyd はアフリカ国家における領域支配を、首都圏、縁辺単位、影響圏の三段階に分けて考えることを主張している^⑧。また、A. Southall のいう分節的国家の特性をあげると、権威は中心から遠ざかるほど稀薄になる、中央政府は相対的統制権しか行使できない、中央では専門化された行政が行われるが、それは縮小された形で様々な所で再現される、中央権威は力の正当行使の絶対的独占権を持つものではない、服従の諸水準の関係はピラミッド的である。服従する諸権威は周辺の位置を占めるほどその忠誠先を変更するものである、などというものである^⑨。

これらの人類学の中から提出された論点を、従来、領域の問題を中心的な課題としてきた地理学の古典的見解より探索すると、すでに F. Ratzel が「定まった境界の欠如が未開国家の本質であり……政治的中心に全体の最も本質的なものが固定される」という見解や、L. Febre の「区画・外縁はあまり重要でない。核心こそ価値があるのであって……」といった指摘が想起される。これらは核心地域の国家における重要性を指摘したものが、核心地域とは「その中あるいは

取り巻いて国家が起源する地域^⑤であり、「どんな地方的小国でも、その胚種はみずからの地理的出発点を持っている」^⑥のである。既に概述してきた三者の運動においても、その核心地域を設けその支配領域を維持せんとする具体的意図は明確に表現されていた。たとえばフラニ「帝国」における首都 Sokoto の建築は、単に政治権力の所在地にとどまらずイスラムの宗教的中枢の構築を意図していた。トックロル「帝国」における、イスラム国家マッシーナの旧首都 Handallahi の踏襲（もっとも初期における）は、神を讃える名を冠するこの都市の精神的価値を認めたものと考えられる。マンディンカ「帝国」の場合も、首都建設が Bissandugu において行われ、領域移転後も Dabakara を首都と定める意図を持った。首都を擁する核心地域の形成はフラニ「帝国」の場合には成功をみた。ジハードにより征服を開始したウスマーン、ウマルは、それぞれ既存のハウサ地方、フータ・トロ、フータ・ジャロン地方という中央権力からすれば辺境の地から、中央に向けてジハードを進行した。フラニ「帝国」では、結局ジハードが最初に進展した Gobir, Kebbi, Zamfara が核心地域となったが、それには Kano に代わって Sokoto が交易ルートを扼する重要地点を占めたことも理由の一つにあげられるであろう。いっぽうウマルのジハードは結局ニジェル河流域地方に進行し、旧来のバンバラ王国所在地の Kaarta と Segui を領域中心とすることになり、さらにマッシーナ征服後はそれを核心地域にする動きを見せたにもかかわらず、内部的動揺と外圧力によりその形成に失敗した。そのことが、フータ・トロの支持層の離反を後継者の時代に招くに至ったとも考えられるのである。マンディンカ「帝国」の場合には、Bissandugu を首都とする核心地域が明確に定められたにもかかわらず、フランスの侵攻により失うに至り、その後の領域の不安定性を招いた。また、これらの「帝国」における都市や *walai* が領域構造において機能したあり方についての検討も興味深いテーマであるが、後の課題として残しておくたいと考える。

⑤ J. Vansina, (1962) op. cit., p. 324 以下。D. Forde と P. M. Kabanyo 編集 *West African Kingdoms in the Nineteenth Century*.

⑥ 1967, Oxford Univ. Press 以下。これら西スーダンの国家は含まれなかった。

- ② 山口昌男 (一九六二) '王制と酋長制' 『ニヒロ・アメリカの伝統的社会構造』トモミ経済研究シリーズ第三集。
- ③ T. Hodgkin, (1962). *Islam and National Movements in West Africa. Journ. of African History*, III-2, p. 324.
- ④ J.S. Trimingham (1962), op. cit., p. 195.
- ⑤ J. Goody (1971) *Technology, Tradition and the State in Africa*, London p. 70.
- ⑥ M. Crowder, (1971) op. cit., p. 6.
- ⑦ Coleman は 'アメリカの政治組織を分類したが、その他には集権的酋長制' 分散的部族社会、小自治地方共同体を類型として挙げてゐる。 J.S. Coleman, (1960) *Politics in Developing Society*, p. 254-8.
- ⑧ 原は 'これを明らかに敷衍して、サステーン・シムントンの支配の形態を地方分権的な「点の支配」、ウエルなどのそれを「面の支配」を基礎とする中央集権と推論している。' 原 op. cit., pp. 161-162.
- ⑨ P. C. Lloyd, (1965) *The Political Structure of African Kingdoms. Political Systems and Distribution of Power*. M. Banton (ed.), London pp. 63-112.
- ⑩ A. Southall, (1965) *A Critique of the Typology of States and Political Systems. Political Systems and the Distribution of Power*. M. Banton (ed.), London pp. 113-138.
- ⑪ F. Ratzel, (1896) *Völkervkunde (History of Mankind*. Eng. trans. by A.J. Butler) London p. 136.
- ⑫ L. Febre, op. cit., p. 199.
- ⑬ D. Whiteley, (1969) *The Earth and the State. The Structure of Political Geography*. R. E. Kasperson & J. V. Minghi (eds.), New York op. 29-33.
- ⑭ L. Febre, op. cit., p. 202.

あとがき

一口に西スーダンとして総体的に扱えられる地域において、十九世紀に繰りひろげられた政治的領域の形成は、それぞれ独自の展開を示した。M. Last はそれらの領域的活動の原動力となったジハードの前期(フラニ)と後期(トゥクロル、マンディンカ)の性質が著しく異なり、前者が短期間に終結した(約四年間)のに比べ、後期のそれが長期にわたるかつ著しく破壊的であったことを指摘している^①。この相異は、いうまでもなく西スーダンにおけるヨーロッパ植民地主義勢力の浸透の質の時代的な違いにもとづいている。交易の要衝とその背後の資源を希求したヨーロッパ勢力は、それがもたらす火器を望むアフリカ社会の地方政治権力の間隙を縫いあるいはそれらと衝突を重ね侵攻した。当面する敵に武器供給を依存したアフリカ社会の抵抗は、従って一定の限界を招かざるを得なかつたのである^②。一八八四年のベルリン会議を

前後として、ヨーロッパ諸国のアフリカ分割競争は、さらに直接的かつ全面的な領土征服の形態をとり拍車がかけられたが、時同じくして政治的領域を拡大しつつあったウマルやサモリの運動は必然的に激烈な抵抗を試みざるを得なかったのであった。

前期・後期の運動形態の相異は、そうした植民地主義勢力の浸透に伴って起こった、アフリカ社会の内部的動揺と経済構造の変化に従うという理解もまた可能なであろう。すでに原も紹介を試みているが、セネガンビアにおける Ma-Ba の運動について M. A. Klein の分析は、ピーナツ栽培の導入による農民層の経済的地位の向上が、既成の社会的階層秩序をもたらしたと指摘している。また、同じくセネガンビア地方のマディンゴの運動についての C. A. Quinn の立場もその転覆に近い。^④西スーダンにおける交易活動の枠組が、政治指権力を支持したことは、本稿でも若干触れるにとどめたが従来よりも指摘するところが少なくない。^⑤しかしながら、経済構造の変化の分析と、政治・社会構造の変動研究とが、西スーダンにおいて密接に関わることは例が乏しく、今後の課題に待たねばならない。^⑥

いっぽう、これらの国家の領域的活動の展開過程で、並存した他のアフリカ社会の諸々の政治権力と維持した相互関係は、これらの国家の特質の逆証明になってくれる。ソコト対ボルヌ、トックロール対マシーナのイスラム国家相互の対立関係や、サモリ対シカソンのフランスをもからませた抵抗、*kyra*に、J. R. V. Prescott がフラニ「帝国」の領域設定の作業において提出した、交易・移住・抗争などにもとづく「接触の境界」*Frontier of Contact* の概念の適用も、こうしたアフリカ社会の内部的相互関係の間でそれぞれを明らかにする立場からも考慮される必要があるであろう。その際、J. Holden が提起したローカルな政治史のアプローチが、方法論として有効であろう、との見通しが得られる。そうした作業の蓄積の結果、はじめ、ウマルやサモリが展開した運動の記憶が、なお現在のマリ共和国、ギニア共和国において政治的風土として残されている意味が明らかになることであろう。^⑦

⑦ M. Last, (1974) *Reform in West Africa: the Jihad movements*

of the nineteenth century. *History of Africa*. vol. II. J. F. A.

Ajayi & M. Crowder (eds.), London, p. 1.

- ③ J. Goody, (1971) op. cit., p. 28.
- ④ 尾形誠一 op. cit., pp. 157-159. M. A. Klein (1968) *Islam and Imperialism in Senegal*. Edinburgh.
- ⑤ C. A. Q uinn, (1972) *Mandingo Kingdoms of the Senegambia; Traditionism, Islam and European Expansion*. Northwestern Univ., Press.
- ⑥ Y. Person, (1974) The Atlantic coast and the southern Savannahs, 1800-1880. *History of West Africa*, vol. II. J. F. A. Ajayi & M. Crowder (eds.), London pp. 262-307.
- ⑦ Hopkins の包括的研究が数少ない一例としてあげられたい。A. G.

Hopkins, (1973) *An Economic History of West Africa*, London.

- ⑧ J. R. V. Prescott, (1965) *The Geography of Frontiers and Boundaries*, London p. 51.
- ⑨ J. Holden, (1970) The Samorian impact on Buna: an Essay in Methodology. *African Perspectives*. C. Allen & B. W. Johnson (eds.), Cambridge.
- ⑩ T. O. Ranger, (1968) Connexions Between 'Primary Resistance' Movements and Modern Mass Nationalism in East and Central Africa, Part I, *Journal of African History*, IX-3, p. 439.

(京都大学大学院・)

Sparta's Anti-Argive Policy

by

Yuichiro Shinmura

The long-lasting conflict between Sparta and Argos began in the second half of the eighth century B. C. Some of the Eurypontid-kings invaded Argolis with Spartan army, but in 669/8 B. C. (the battle at Hysiai) Spartan advance was checked. This Sparta's defeat caused the Messenian revolt (i. e. the Second Messenian war). After the war Sparta reformed by degrees social and political system, which paved the way for the reorientation of policy. In the middle of the sixth century B. C. Sparta changed her foreign policy to the conclusion of friendly relations.

Holding the friendship with the Arcadians, Sparta could keep the Messenians in check and isolate the Argives.

Les territoires politiques du Soudan ouest au XIX^e siècle

par

Masaru Akasaka

Le trait caractéristique de la région du Soudan ouest, c'est que la culture islamique est profondément imprimée dans la société. Il se fait de la communication, depuis longtemps, avec le monde islamique à la côte sud de la Méditerranée, via le Sahara. Ainsi il y a grande mobilité à la base de la société. C'est pourquoi la modèle des arrangements mosaïques des tribus en qualité des microcosmes, dont on usait dans les études des tribus africaines, n'a pas d'efficacité suffisante pour saisir la réalité de cette région. Ces caractères, se sont-ils montrés déjà dans les développements territoriaux des "anciens royaumes" depuis IX^e siècle. Au XIX^e siècle même, à la veille du partage colonial, des vastes territoires politiques (on les appelle, de temps en temps, "empires") ont été formés par les conquêtes des dirigeants, *Uthman dan Fodio*, *Al-hajj Umar* et *Samory Ture*, tous pourvus de l'autorité charismatique. Ces territoires, avec toutes différences, ont des caractères communs en tant qu'ils tiennent aux mouvements réformistes islamiques.

Mais nous retrouvons aussi des particularité de chaque “empire” partant de sa construction sociale, de sa situation politique ou militaire, en ce qui concerne son développement territorial ou sa structure du gouvernement.

The Making Process of the System of the Sanmon Embassy

by

Mamoru Shimosaka

This article will deal with the political history of *Enryaku-ji* Temple 延暦寺 in the *Muromachi* 室町 period. Hitherto, the studies on this subject have laid stress on the *Santo* 山徒 who had begun to gather strength in Kyoto by being engaged in money lending. However, in view of the relation between *Enryaku-ji* Temple and the *Bakufu* 幕府, the influence of the *Santo* who made *Enryaku-ji* Temple the base and the centre of their lives should be much more appreciated.

Since the civil war in the period of *Northern and Southern Dynasties* 南北朝, the *Muromachi Bakufu* 室町幕府 had not succeeded in controlling the rebellious *Santo*. Therefore, in the reign of *Ashikaga Yoshimitsu* 足利義満, the *Bakufu* organized some of the influential *Santo* as the *Sanmon Ambassadors* 山門使節 in order to place them under its control. In other words, the *Bakufu* tried to exercise its power over them by investing them with the same several privileges as the *Shugo* 守護 had, within the territory of *Sanmon* 山門. This policy toward *Sanmon* once almost failed in consequence of the ‘*Sanmon riot during the Eikyo Era*’ 永享の山門騒乱 which was raised by the *Sanmon Ambassadors*. In the end, however, this policy worked well to rule the *Santo*.

A Study of *Wu-che-wei* 兀者衛 in the Ming 明 Era

by

Yoshihiro Kawachi

Wu-che-wei is a tribe of the Tunguses who lived in the basin of the *Sungari River* 松花江. Few records remain today concerning this tribe.